四代の女たち

四代は、「しだい」と読む。山口県上関町内の一集落の地名である。上関は、歴史的にも由緒のある土地だが、現在では原子力発電所の立地予定地として知られている。予定では原子炉建屋などの施設が建設されることになっている四代地区は、その意味で最重要地区である。

私たちがこの地を訪れたのは、二〇〇〇年の早春だった。松山から柳井港までは、フェリーが出ている。そこから車に乗って一時間余りで、四代の集落に着いた。しかしそれから先は、大変だった。舗装されていない曲がりくねった道を延々と行かねばならなかったし、途中からは車を降り茂みを分けて進んで行った。すると急に景色が開け、予定地が現れた。雑木林や草むらの向うに砂浜があり、磯場と陸続きの小島が広がっていた。

地区の住民のほとんどは、計画に賛成し、この土地を中国電力所有の別の土地と交換した。反対は、わずか四人である。亀田トリさんは、「区長が『共有地』を中電にやりたければそれも仕方ない。しかし自分の『一戸前』だけは残してくれ」と言ったそうである。弁護士に相談すると、住民のいわゆる「共有地」は、すなわち入会地ではないか、もしそうなら、全員一致でないと処分できないということで、一九九九年二月、四人は、入会権の確認と中電への移転登記の抹消を求めた訴訟を提起した。

四人に会って、話をきくことができた。うち三人は女性で、世間的にはもうおばあさんと呼んでも怒られない年格好だ。しかし実に意気軒昂だった。彼女らの顔を見ながら私は、男に比べて女性は、いろいろなしがらみが少ない分、自分の気持ちに素直に行動できるのだろうかと、思った。

今年に入ってつい先日（三月二八日）、第一審の判決が出た。山口地裁岩国支部は、原告側の入会権の主張を認め、中電による土地の現状変更を禁じた。新聞報道は、「計画の大幅な見直しが必要」と伝えている。